



IMPACT CREATOR

03 ————— 02



NORIYUKI ITO

このままでは安心して死ねない
伊藤紀幸

伊藤紀幸

生きているうちに仕組み作りを

起業を決意する

私の息子には知的障がいと、身体に少し障がいがあります。彼が養護学校小学部1年生の時に先生から「障がい者のほんとは就職が困難で、運よく就労できれば月給3千円程度の工賃です」と言われました。

普通の健常児の親なら将来のために習いごとをさせたりするこの時期に、私はすでに道が閉じられた気持ちになりました。当時の私の深夜手当がついた1時間の残業代と同程度の月給。これではペットボトルの飲み物1本満足に買えない。これはどこがおかしいのではないかと、このままでは安心して死ねない、親として安心して死にたい、生きているうちに障がい者が働くための仕組み作りをしたい、そう思うようになりました。

そんなおりに、ヤマト運輸の故・小倉昌男会長の生きざまを知る機会がありました。得た自

身の富のほとんどを使い、ノーマライゼーション（*1）の理念を実現させるために、焼きたてパンを販売する「スワンベーカー」を経営する会社（株式会社スワン）を立ち上げ、晩年は福祉の世界に身を捧げられました。

「私も障がい者が働く会社を起業したい」と思うようになりました。

半年悩んだ後に、脱サラしました。自分が持っている不動産の資格を活かし、2002年に不動産投資の株式会社を設立。そこから10年、起業のための資金を一生懸命に貯めました。

（*1）障がい者も健常者も平等に生活する社会を実現させる理念。

チョコレートだ!!

ビジネスドメインを何にするかは、資金を貯めながら模索し続けました。私にとって心から



伊藤紀幸
いのりゆき

一般社団法人 AOH 障がい者のはたらく支援工房 ショコラボ 会長

1965年生まれ。三井信託銀行株式会社（現・三井住友信託銀行株式会社）に勤務していた29歳の時に障がいがある息子を授かる。その後も、日本の格付機関である株式会社日本格付研究所（JCR）、外資系のムーディーズ・ジャパン株式会社においてアナリストの道を進む。「障がい者の工賃は月給3千円程度」という言葉に衝撃を受け、雇用の創出と賃金改善のために起業を決意。不動産鑑定評価業務を主とする株式会社不動産投資研究所を独立開業し資金を貯める。10年を経て2012年9月一般社団法人 AOH を設立。同年11月、就労移行支援施設として全国初の福祉事業所となるチョコレート工房ショコラボをオープン。プロのパティシエなどの健常者と障がい者の才能をコラボレーションさせ、マーケットを意識した「売れる商品」を開発生産。JRの駅や有名百貨店、ホテルなどで販売。障がい者雇用における既成概念にとらわれない「経営する福祉」が評判を呼び、数多くのメディアで紹介される。

健常者と障がい者がそれぞれに持っている
たくさんの才能を組み合わせ、
新しい価値を生み出したい

05

健常者とのコラボレーション

新しい価値創造を目指す

それから半年後、全国ではじめての福祉事業所によるチョコレート工房「ショコラボ」がオープンしました。

ショコラボは就労移行支援の福祉事業所です。就労支援事業というのは、企業などで働きたい障がい者に対して必要な知識と能力を高める訓練を行うというミッションがあります。例えば工場なら、健常者と同じラインに立ち、検品などの作業をできるようにトレーニングをします。それが彼らの成長につながり、就労のチャンスが増えること定義されているのです。

けれど私はずっと、「障がい者がハンディキャップを負っているのは事実なのだから、そもそも健常者に近づく必要性があるのだろうか？ 健常者の世界が正しいわけでも、目指すべき到達点でもないのでは？」と

考えてきました。企業による障がい者雇用とはこういうもの。障がい者の作業所とはこういうもの。作業内容やペース、工賃はこのくらい。こうした既成概念に合わせて環境ができあがっていきませんが、それが現状は何ら変わりません。

「チョコレートは職人の仕事だから障がい者には難しい」と多くの人に言われました。でも、自分がやろうとしていることは、この既成概念にもとらわれたくない、新しい仕組み作りなのだからと気にしませんでした。

「ショコラボ」という名前は、「フランス語のショコラ（チョコレートの意味）」と「コラボレーション」を組み合わせたものです。

健常者の中にも、会議で自分の能力を発揮できる人、営業畑が得意な人など、それぞれ個性があるように、障がい者にも個

が寝てしまうし、内装工事費が数千万円かかる。小売に立つ健常者の人件費が毎月かかり、雇用に直結しない。格好つけずに第二次産業（*3）である工場をやれば、貯めたお金がすぐに障がい者の雇用に結びつく」と助言をいただきました。しかし、私は第二次産業なんてやったこともないし、人脈もノウハウも何もありませんでした。

それから1週間後に聴講した講演会で、ワタミ株式会社創業者の渡邊美樹氏の「頭で考えたビジネスはことごとく失敗した。心で感じたビジネスはことごとく成功した」という言葉が心に響きました。そうだ、結局何をやってもリスクはある。頭で考えないで、心で感じたビジネスをやろう。

最後は、出かけた先で通りがかったチョコレートショップの店内で妻が言った「パパの好きな、チョコレート屋をやったら？」の一言。「そうだ！ チョコレートだ！」とその場で即決しました。

その方から「伊藤さんが考えている第三次産業（*2）では数金・権利金で1年分の家賃

（*2）商業・金融業・サービス業・情報・運輸通信業など
（*3）鉱工業・製造業・建設業など

性や得意なことがあります。それを「才能」とするならば、わざわざ健康者に近づける必要はありません。健康者と障がい者の持っているたさんの才能を組み合わせ、コラボレーションさせることで、新しい価値創造「Creating Shared Value」を（*4）を生み出し、本来の意味でのノーマライゼーションを実現することができま。

一緒に働く健康者は、障がい者の仕事の割り振りなどをメインに行いますが、支援・訓練するのではなく、共生・共働する仲間という立場です。そして、障がい者と健康者がそれぞれの個性や得意なことを活かせるように適材適所をモットーに作業します。こうしてお互いを成長させていくのです。

そして商品に関しては、もともと重要な事業の継続性のために、「売れる商品」を作る必要があると考えました。百貨店でもどこも売っている商品、マーケットを意識した商品作りです。そのためにプロのパティシエに技術指導に入ってもらい、食べておいしい、高品質の手作りチョコレート製造すること

に決めました。これも障がい者とプロフェッショナルとのコラボレーションです。

その他に、ブランドチョコレートにも廉価商品にも負けないよう、価格は中価格帯で勝負する。リアル店舗は構えずに固定費を抑え、催事やオンラインショップをメインにすることで販管費を削減する。パッケージや包装材料などはこだわり、SNSも活用する、などということも決めました。

こうして、既成概念にとらわれないチョコレート工房、「シヨコロポ」が動き出しました。

（*4）企業が事業活動を通して、社会課題の解決と利益の創出を両立すること。

まだまだ道半ば いつかは全員雇用へ

立ち上げから4年ほどは、私はほぼ工房にすることができませんでした。販売先開拓のため、営業で走り回っていたのです。新しい価値創造に人生を賭けていましたから。

業界を知らず前例を気にしな

いので、営業スタイルも既成概念とは無関係。大手高級小売店の副社長に直接お会いしてシヨコロポのコンセプトを説明し、掛け率も何も決めるずに意気投合して握手ひとつで取り扱いが決まる、ということもありました。業界から見たらとてもないことかもしれませんが、でも私は信じる道だけを見通して、共感してくれる人だけ握手をするように決めていました。

今では多くの有名百貨店やホテル、高級スーパーなどで販売していただいています。百貨店のカタログには堂々と「シヨコロポ」の名前が載っています。障がい者たちと作っているチョコレートということを隠してなどいけません。現在はいずれい悲鳴で、製造が追いつかないので新規開拓は控えているくらい。おかげさまで、やっと私も1日の半分ぐらいは工房にいられるようになりました。

シヨコロポで就労移行支援の訓練を受ける障がい者の月収は3万1千円になりました（2018年10月現在）。全国平均のおよそ倍ではありますが、まだまだ道半ば。目標は月収10万円。

07

06

そのためには福祉事業所の「利用」という形ではなく、株式会社に

社にして障がい者を正式に「雇用」する必要がある。

一気に成長することは難しい。息の長い事業にすることが重要で、最初から段階を踏んでサステイナブル成長を意識してきました。少しずつ確実に会社を成長させ、持続的な利益を目指したいです。

シヨコロポは就労支援事業の福祉作業所なので、企業に就職が決まった卒業生もたくさん輩出してきました。シヨコロポでの特技を活かして、世界的な有名ホテルのパティシエ部門での就職が決まった子もいます。

業界では第2、第3のシヨコロポを目指す作業所も出てきました。

今はようやく右肩上がりに成長し、フェーズが終わったところでしょうか。まずは基礎づくりをしたところ。次は自分が作った株式会社でコラボレーションを実践していく段階だと考

えています。障がい者も健康者も、シヨコロポで頑張っていればみんなが幸せな人生を築けるように。私が生きているうちに「全員雇用」を実現させて、次の世代に引き継いでいきたいです。

私はこの6年間、土日なしで働いてきました。私にとってシヨコロポは子どものようなもの。大変なことはと聞かれたら「いろいろなあった」の一言に尽きます。

失敗や苦労を経験すれば人間だからへこたれるし、がつくりきます。でも、シヨコロポをやる決めていたから、並大抵のことではへこたれません。ラグビーでタックルされて倒れても、またすぐ起き上がって走り出すのと同じ。ゴールに向かって絶対にトライするんだと決めているから、途中で倒れたくらいは何でもない。すぐ立ち上がってまた進めばいいだけです。

（取材／2018年9月）

心の支え

「過去と他人は変えられない。しかし、いまここからはじまる未来と自分を変えられる。」カナダの心理学者エリック・バーンの名言。

息子に障がいがあるとわかった時、心が折れました。けれど、どんなに嘆いても事実とは変わりません。だとしたら、自分が事実とどのように向き合うのが大切。自分が変わり本気で取り組みれば未来さえも変えることができます。

CREATOR'S LION



ライオンキング
のような
勇気と誇り

COMPANY PROFILE

一般社団法人 AOH / シヨコロポ

全国で初の福祉事業所によるチョコレート工房。障がい者の雇用拡大と賃金アップを目指し、障がい者と健康者の共生・共働、マーケットを意識した商品作りなどの試みが評判を呼び、数多くのメディアで紹介される。プロのパティシエとコラボレーションした商品は、地元・神奈川県を中心に、全国の百貨店、高級スーパーなどで販売され、カタログギフトなどにも掲載されている。現在はオンラインショップでも販売中。

Address 横浜市都筑区茅ヶ崎中央 30-17 <https://chocolabo.or.jp>

マーケットを意識した本格的なチョコレート

